

わたしの聖戦

女性が
働くこと
ということ

医学ジャーナリスト・医学博士

植田美津恵

連
252
載

心理学とは何だろう

どんな分野を学びたいかは人それぞれだが、時代が変わっても人気が衰えないのが「心理学」だ。心理学に興味がある、心理学の研究がしたい、という台詞はよく耳にする。

過去、有名な心理学の実験は各国で行われてきた。その中のひとつに「ハーロウの代理母実験」と呼ばれているものがある。別名「アカゲザルの愛着形成に関する実験」ともいう。

心理学における愛着とは、乳幼児期に母親などの養育者との間に築かれる結びつきのこと。ぶつちやけていえば、乳幼児期には無条件に自分を可愛がってくれる信頼でき

る大人が必要ということだ。ちなみにこの言葉、仏教では執着を意味し、苦しみを生み出す原因とされ、肯定的には使われない。

アメリカはウインスコニンシ大学のハーロウは、生まれたばかりのアカゲザルを母親から引き離し、2種類の代理母のケージに入れ、どのくらいそこに滞在するのか、時間を測った。

代理母①は、針金で作ったサルだが哺乳瓶をつけており、ミルクを飲むことができる。代理母②は、針金を布で巻き、温かみを感じさせるつくりにしたもの。ただし、哺乳瓶はない。

結果は想像できると思うが、アカゲザルたちはいずれもミルクを飲む時だけ代理母①のケージに入るが、それ以外は布製の代理母②のケージにいる時間の方がはるかに長かった。つまり、空腹を満たすことも大事だが、それよりも温かみを好んだという結果を示したの



だ。それまでの心理学における愛着の考え方は、子どもは栄養を与えてくれる大人に愛着を覚えるというものだったのが、ハーロウの実験はこれを覆した。いわゆるスキップの大切さを証明したことになる。

ちゃんたちは、その後成長するに従い自傷行為や暴力的な行動を起こすようになる、結局その原因は、生まれてすぐに母ザルから離されたためということになり、ハーロウの実験は賞賛されるとともに非難も受けた。これ以後、アメリカでは動物実験を行う際の倫理規定が厳しいものになっていく。ハーロウの実験はY o u T u b eで観ることができるので、興味があれば是非ご覧いただきたい。

たい気持ちの中には、普段疑問に思っていることやわからないことを知りたいという純粋な欲求や、探究心があるのだろうか、過ぎた行為は、対象者を傷つけてしまいかねない。

心理学ブームの背景には、不安定な収入、仕事や家庭の悩み、さらには不可解な犯罪の発生など、いわゆる先が見えず、生きづらいと感じている人が多いことも影響しているように思う。しかし、そもそも人生とは思いつりにはならないようになってきているものだ。

ハーロウは心理学の歴史に名を残したが、自身は妻や子どもたちと良好な関係を築けず、重度のうつ病とアルコール依存症に苦しんだ。亡くなる前、彼の頭の中をよぎったものは何だったろう。……おっと、くれぐれも想像するのはほどほどに。

イラスト・伊藤香澄